

認知プロセスの脱構築—過去と未来をシミュレーション（予測）する記憶

高知医療学院

園田 義顕

ペルフェッティは、行為によって都度生じる外界との相互作用が主体の記憶を形成し、またそれ自体が身体化された認知（Embodied cognition）であるとともに、それを参照して次の行為を行うという意味において「すべての行為は、行為する主体の歴史の一部である」と表現する。またウォルター・J・フリーマンは、自身の神経科学者としての思考の土台を志向性（Intentionality）の哲学におき、「脳はその身体を世界に突き出し、そこで出会うすべてのものに合致するように自らの身体を変容させることによって、環境について学習する。期待は脳において仮説として形成され、志向的行動によって肯定されたり否定されたりする。」と表現する。

このような行為することと知覚することのサイクルのなかに、メルロ・ポンティは反射弓（Reflex arc）の逆向きの作用を指して「志向性の弧（あるいは志向弓；Intentional arc）」があると指摘していた。このサイクルの予測に関与するものが、運動のコマンドに該当する遠心性情報のコピー（Efference copyもしくは随伴発射;corollary discharge）であるが、フリーマンはそれを「プリアフェレンス：前求心情報;preafference」と呼び、志向性の弧を支える神経メカニズムのモデルを提示している。

本講演では、意図、志向性、記憶、予測、比較、イメージといった一見拡散したように見える本学会テーマに含まれたキーワードを、アノーキンモデルからフリーマンモデルへの統合、転換を図ることで、複雑な思考から単純な方法（訓練）への収束が可能か検討したいと考えている。またそれを背景に、「以前この行為をどのように行っていましたか？」との問いにはじまるリハビリテーションは、未来を予期する脳の働きを助けることができるか議論していきたい。